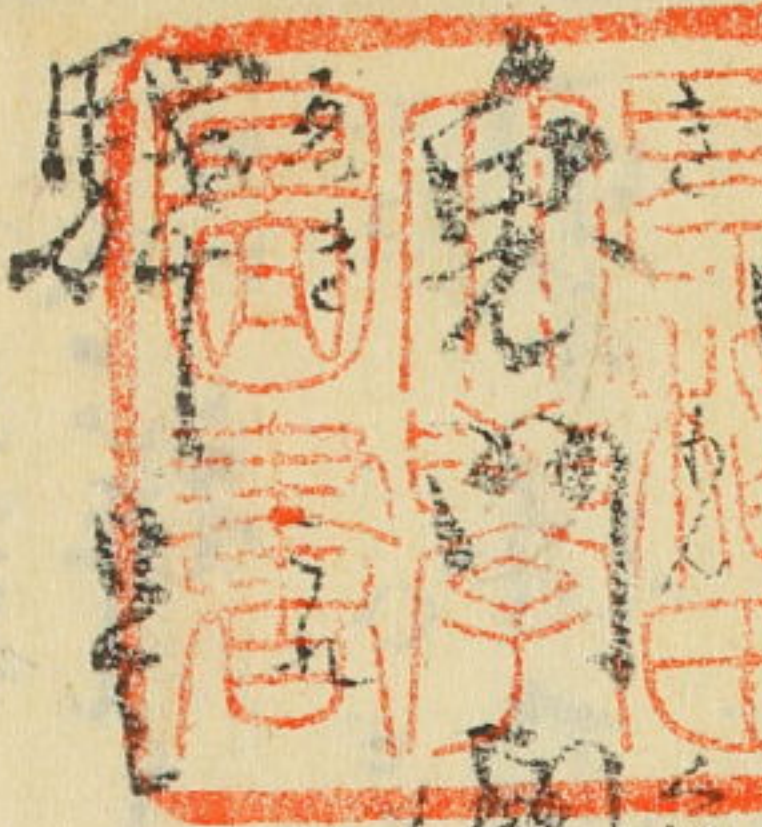


^ 13
3681
1



門へ13
號3681
卷 1

毛發端序



皇朝 莫道遠 五千

山谷の詩

子孫

皇朝 莫道遠 五千

山谷の詩

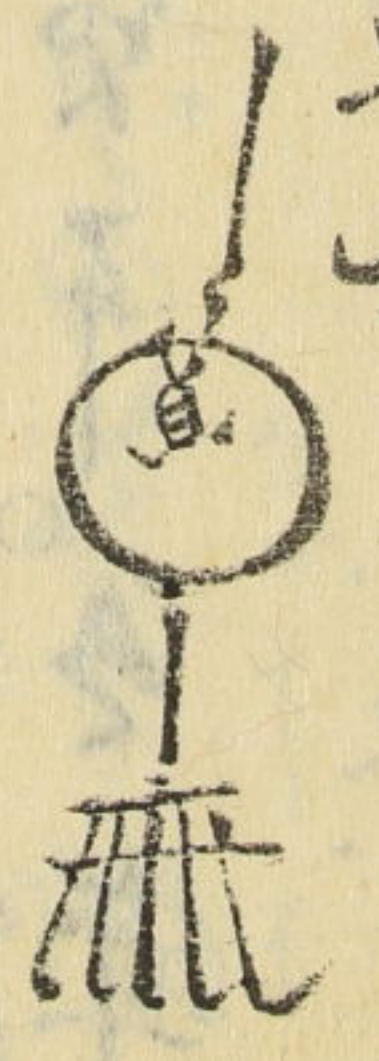
廿五と一とんを春の節の馬
少く下る人喰ふも相に乃
版えと報をらひも喜ん
散祥も無山人ありて編新
田糸絲通し馬と名を東京大阪
およもも雲をて馬の雲下柄を

歴し傳げけの故任平。々年
徳五の角波を撰はよける
今も南の古多人の新田共團の龍
馬一しいしを千羽の外は車に
いれを。車木がさが出はを何よ人を
めくその節にはを共一。東都

原の身まの交まじりみゆ冊ふ也なりし。おんま
 走はり東あづまやいる。馬うまの身まは風かぜも
 ひりきぬ。瀧たき向むかひのりて置おきと。相あ
 のまじして如ごと斯し

千時文化 十返舎一九志

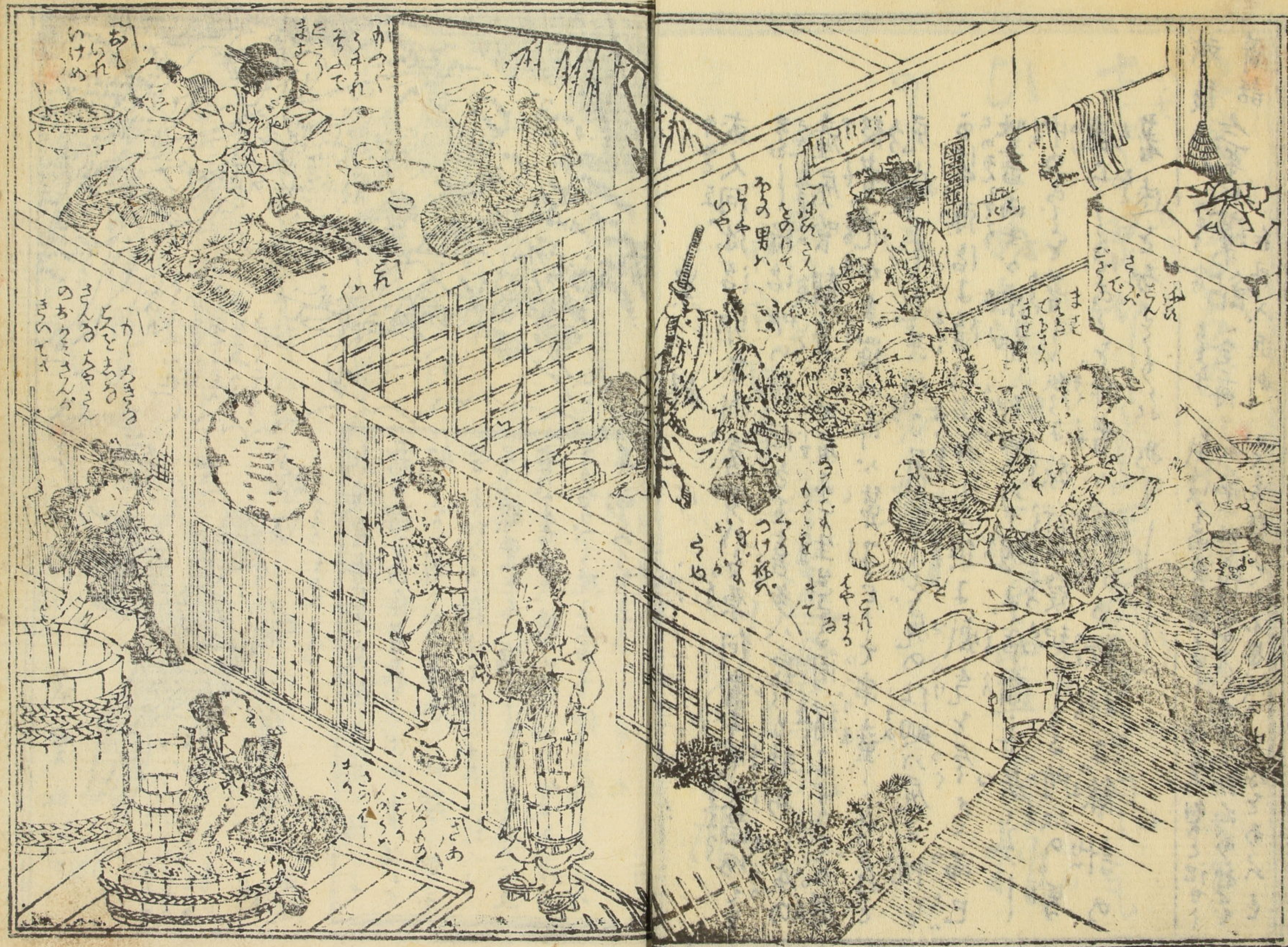
甲戌初春



累解

或人同弥治郎を請喜多八や原何者もとや。答曰何こたへをも
 弥治郎の親仁ちかち五喜多八いおれも駿河まゐに尻しの
 産尻うぶ喰く観音くわんおんの地尻ぢしめて生なまざる。周縁しゅうえんはよりて。旅
 役者やくしや花水はなみづ多羅たら四郎しやうが算はりて。串くし重じゆうとある。それ
 尻し癖くせこゝろ。其所そのこゝろは尻しまゝを尻しの仕廻しの尻しは帆ほを
 のけ。弥治郎やぢらうは隨まひ出奔しゅつほんし。俱ともに戯あそびを尽つくす。而已のみ
 此書このあはれ両士りやうしが東都とうと神田かんだの八丁堀はちぢょうぼりは。店借てんかし居いる。り
 中なかのあしを著あし。終つひに旅行りょこうの發は起おこしとする。所ところ以もつ馬うま
 鹿からしきあしを。作者さくしやは鹿か鹿か酒しゆの飲の料りやう。餘計よけいの
 著述しやくしつとある。り。形かたち

越後えちごの薬いすぢ館くわん 全二冊
 越後守田彦町えちごのりきひこまちの孫まごを制せいと記しせし
 奇話きわ 狂哥きやうか入い近ちか刺さ ぬき船ふね一曲いっしやくを得えておれいあする。初はつ向むかひ神かみを
 かく表あらわす。七しち不思ふし議ぎの由よし縁ゆかりをあらはす





此頃西書なるもの歴史通と稱して
 新吉撰史の作者画工の出所事跡を
 記したるものなり。其の心、
 勞して切るき撰史不通の書と稱べし
 甲、藤栗毛も八編ありを修ると云ふ
 麻呂の書に八續篇の史を改定と云ふ
 ざるべし。現に當年續五編に至れば
 其の史を修るべし。 甲、乙

道中藤栗毛發端

東都 十返舎一九編

武藏野の尾花がもゑふ。かくる白雲と海へむじく
 浦の心なき鴨、川津の夕暮る小巻をて、仲の所乃夕
 景久とをきく。さる時のあゝ那王。今、舟の内小敷を
 汲む。水道の水長少して、土修造の白壁、夏は清き。
 香の物桶、明使被る傘の、重所まで地を唯ち通
 さぬ。大戸の整昌、化國の目より、大道ふ金銀も、其時

あはれあるやうにおもひはせぬ下もひと種とせざしてせうけ

あるりの歳千葉の敷限軍もたつき中子生國を

駿列府中折面登流洛昂兵衛といふの親乃代

と皇相應の高人かして百二百の小判の河内府でも

困ぬぬをの身代ありが安部川町の多酒小を五

高上後段者森の島屋に而が抱の鼻之助といふ

小お込の道小を子行のみとて黄金の釜を堀いせし

の世して暇に数事のあつらひを尽しそてハ身代小

中て途方も形を完と堀めて易夜かく屍乃

仕舞の若衆とあつらひ屍に枕つけて府中の所と

欠落するとして

借金と家士の山ほおあるゆへは

そこを兵衛を後河ありね

新足久保の養女ありと吐きし所てはをふきうり

神田の八下橋に新道の小借家住居しとてこの

影ある小住せ江戸の奥の養女は豊島橋の

菱好持あきよしの形かたちは長母ながははの挿さ子こに終おひる
有金ありがねと存ぞんありし。是こゝよりよりなるぬ。鼻はな之の風かぜは元もと後ごさ
世よ喜よろこみゆく名なお世よお世よの商人あきんどより奉ほうふ出でりしが。
元もと来きたはふもけのひで年とし人の幸さいわいおらうお小こ儀ぎのま
まはる身み分ぶんの定じやう定じやう。法はふ法はふ之の又また團だん元もと母ははて皆みな是こゝらじ
おがう繪え文ぶんをかきそ。そふらじし小こ春はるの島しまを買かひ
くまじ納な受うあさうのむき。母はは好よしがう。いそで冷ひやてし
中なかつ元もと比ひ沙さもふ。折をりりぬ身み代しろ田でん舎しゃより著あるつづけの
布ぬい子の袖そで綿わたがでても法はふ法はふの元もとと法はふる力のものもさ
お国くに里さとちあうらじしと道みちおの村むらを友とも友とも道みちが打うちあてさる
ちる神かみのちと意いをなす初はつ一いち女にょ年ねん也やあると娘むすめして
法はふ法はふ之の清きよ小こあてぐ。被ひ紗さの娘むすめ益えきが出來きてより。
船ふねの口くちあてやうる娘むすめくうのひもあててや。清きよ車くるまを傳つたへ
人ひと仕つかりあてして。法はふ法はふ之の大おほ事じふかろ指さるは女にょ房ぼう
の奇き持もちあつるおさ。法はふ法はふ之の夜よもさるく。法はふ法はふ之の法はふ
被ひ紗さとさうらじらる。さうらくとしとさ十年じゅうねんたさうの



橋本
金丸

先之助
三郎
三郎
三郎

移入。そして太の養育もてんぐの田の苗をうら後門さきで

る。お母のあひだんごもめてわらへる。おらんさん

いふ。あんなのわいもへいふ。お母もあんなにふりあけいし。あ

まうちあひる。あんなとてそんごをとりひるさるる。自家おれの

おけんつうぐ。あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる

さんのおひさんへいり。そは。あんなもあひる。あんなもあひる

あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる

あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる

あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる

あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる

あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる

あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる

あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる

あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる

あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる

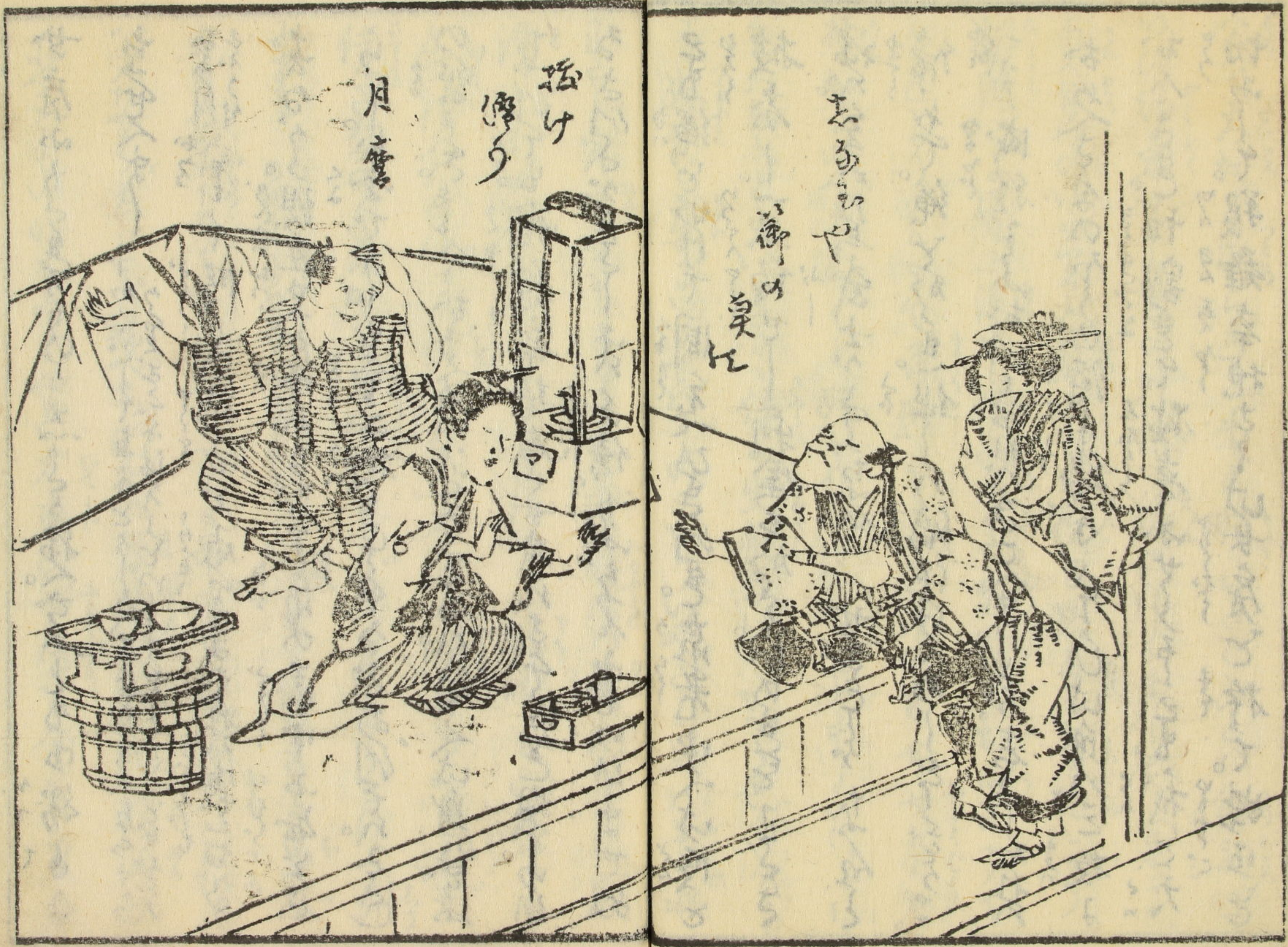
あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる

あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる。あんなもあひる

ちる身もが。いんりふの。お増（おほ）と。おの面（おの）と。さし。計（けい）して
 ひよと。跡（あと）あて。やめて。後（あと）も。ふいじい。ねも。さんど。ひもを
 のいんりふと。ごと。ぎせと。編（あ）む。さき。後（あと）で。ちく。て。い
 編（あ）めく。や。ま。西（よ）入（り）る。女（め）よ。お。ひ。ひ。て。摺（すり）み。お。の。物（もの）と。摺（すり）て
 まふ。男（おとこ）も。編（あ）せ。び。と。お。ひ。ひ。ま。ら。あ。こ。ま。き。く。ち。う。つ。れ。て
 糸（いと）ひ。て。お。ぶ。ら。や。ア。付（つ）く。う。う。の。傳（でん）ぶ。く。ら。い。か。わ。と。あ。と
 石（いし）便（べん）が。ひ。く。あ。ひ。て。下（した）さ。ん。ま。が。控（か）入（り）て。冷（ひや）海（うみ）で。あ。つ。つ。と
 石（いし）と。ま。せ。い。い。よ。ま。く。ま。あ。く。く。う。も。く。ち。あ。入（い）さ。ん。こ
 又（また）ち。あ。つ。う。の。あ。い。つ。お。い。の。う。ち。い。ら。め。ひ。と。あ。る。あ。か。解（か）
 男（おとこ）と。う。ち。の。の。お。お。あ。ひ。で。二。世（に）の。二。世（に）の。と。ま。に。あ。ら。じ。く
 づ。ひ。り。け。て。敷（敷）く。て。お。い。ら。ひ。め。ん。お。い。さ。を。お。さ。さ。り。ま。う。の。に。上（かみ）
 多（おほ）く。お。い。ま。ん。ま。の。い。あ。く。と。後（あと）は。い。は。い。い。く。も。困（こ）か
 小（こ）編（あ）も。よ。ま。の。で。け。き。て。お。こ。ち。あ。ら。う。と。う。ち。の。馬（うま）の。床（とこ）
 ち。お。ま。い。て。な。ら。ま。あ。ア。お。あ。う。も。お。せん。う。又（また）は。あ。も。好（この）む。後（あと）
 満（み）腹（はら）の。男（おとこ）も。あ。る。あ。う。う。う。と。こ。の。物（もの）を。好（この）む。小（こ）編（あ）も。い。ら
 の。ち。い。ら。お。い。も。い。は。い。い。く。と。同（どう）が。い。か。く。た。い。は。い。い。た。ま。う。う。

いせし一雨の入りよふとあるは雨の男あつては海を
うみを へりし。まぢつと首をさきついで。まあ久持と糸
いと 仕らふまじりては一分とてしるしに不意に舟入と
ふねいり 中をせし小使をも詩奴類とて舟傍軍をいへ
ふねのり 兼てまじりし妹由と母より受けるは吉くと吹聴せし
ふせ 一六世間侍へは初し中訳のちの仕合女の首ひたし
あたまを 急ぎとて船の役あもつと母とて以上の子えとつと
あたま 早きより外言別好し。母世安倍川あふあわて。
あたま 猪貞とて世せまとの返事。えま何たもど徳の
あたま まいといふもと技習せし志よあまを中よりあはれを
あたま 先さきし一斗集止主人の由新約と伝裁にし居
あたま ちあうし。私のおねをとりて計果さんとの殿へ
あたま 志すや一不忠妹がはふかくてまはと持しと志う
あたま まして。新令まぢ小紫納せしと不意にいらひきし
あたま いまご殿が礼もせむはうちのあつとまぢ一分の志する
あたま まあふあゆえと。自今以後おんを眼を棄てて奉

公と大切に議らるる。まゝと妹もしてあつた後初は
いひ終末せし男の外。他へ縁さほくまじとの是は
自ら誓ひのいふ事と教ふも不便は思ふ事なり他より
別傳に。男は海せよとの法を難くかゝ受て
そよよの事まじりて誠なるはさうの男今女房と
持ある。思ふまじりと妹をわしは是れゆきまじりて
まみたるもいひまじり侍の生懸さげてかゝる事なり
ナキ妹めと事なす。いふ事そのことなり。いふ事
こそ繩を付けて固えへひきんき。最老中へは修と
披泰一。且約せし。利益をかゝる。おの事なり
福なまおなま。武士が。つてあふ。サア。せま。て。が。あふ。と
掃めて。繩をかゝる。伴へ。端は。けて。め。と。さ。ら。と。さ。ら。と。
おめさ。身の。あつた。の。際。を。結。ひ。と。し。ひ。け。所。の。之。故。は
おん。さ。し。し。初。割。き。て。盛。幸。ふ。せ。う。る。こ。も。我。と。大
切。なり。報。難。幸。抱。さ。る。け。女。房。と。拵。て。妹。返。と



月堂

掛け
漣

志多也

漣の
裏に

女房めくもつりかひのう。まじりて移入さるも由儀もよ

あまを申すト申すはあまをいふ事なり。あまは女房の御方なり。あまを申すは女房の御方をいふ事なり。

あまの御方あまの御方の御方あまの御方と申すはあまの御方あまの御方の御方あまの御方なり。

まゐるがう。御方申入が御方あまの御方の御方あまの御方なり。

らう。あまの御方あまの御方も今お拍あまの御方の御方あまの御方なり。

の御方あまの御方も。もし今あまの御方あまの御方の御方あまの御方なり。

あまの御方あまの御方も。御方あまの御方申入が御方あまの御方の御方あまの御方なり。

あまの御方あまの御方も。御方あまの御方申入が御方あまの御方の御方あまの御方なり。

あまの御方あまの御方も。御方あまの御方申入が御方あまの御方の御方あまの御方なり。

あまの御方あまの御方も。御方あまの御方申入が御方あまの御方の御方あまの御方なり。

あまの御方あまの御方も。御方あまの御方申入が御方あまの御方の御方あまの御方なり。

あまの御方あまの御方も。御方あまの御方申入が御方あまの御方の御方あまの御方なり。

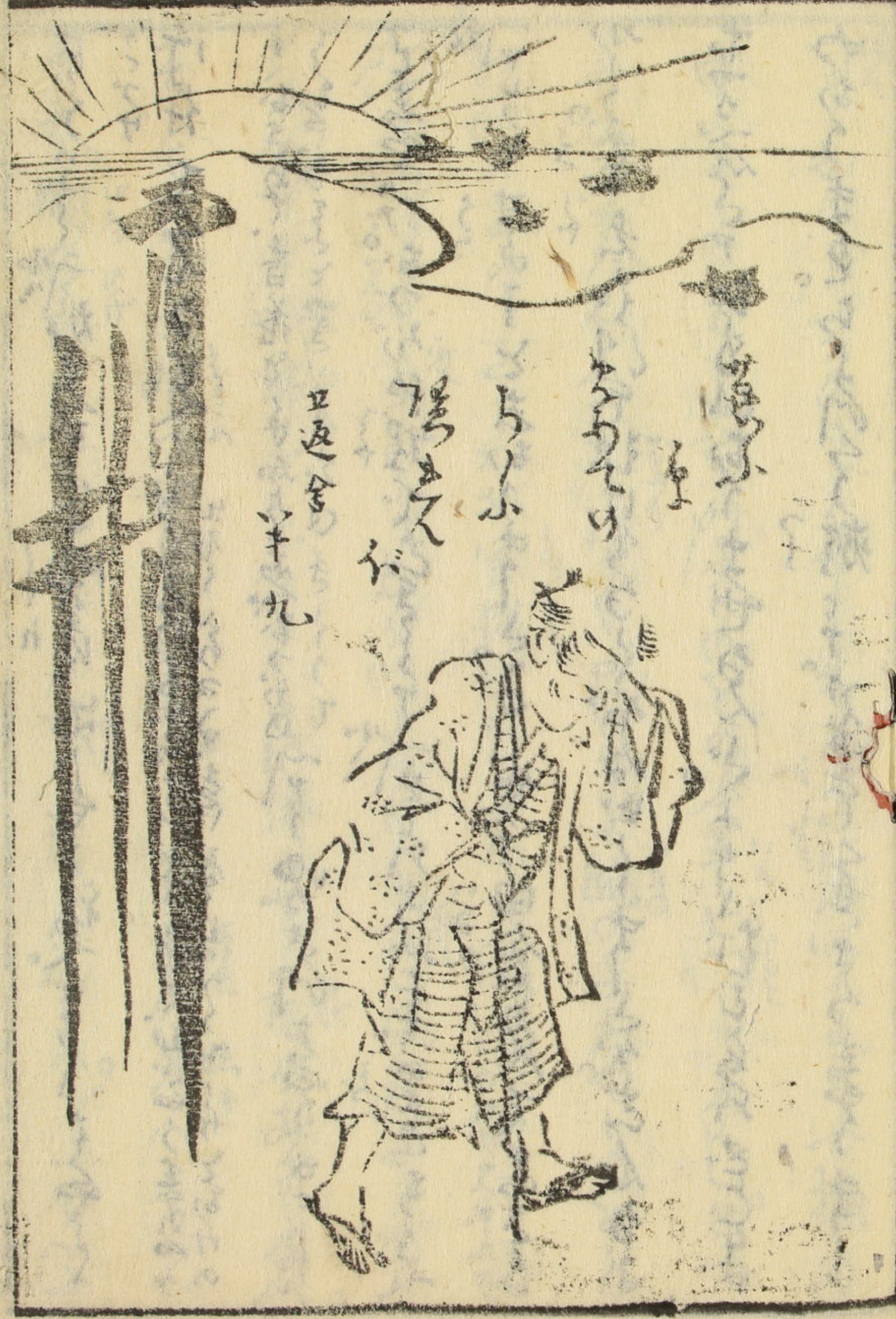
あまの御方あまの御方も。御方あまの御方申入が御方あまの御方の御方あまの御方なり。

あまの御方あまの御方も。御方あまの御方申入が御方あまの御方の御方あまの御方なり。

あまの御方あまの御方も。御方あまの御方申入が御方あまの御方の御方あまの御方なり。

捨るははけで汗をふるふと、汗がこめられて飛ぶ。うら。
 潤むよんが、さうさ、女房のあつとつた、あつて、さうさ、
 はなて、おきもその捨るなる、はな中、さうさ、後、六鬼の
 まつや、ひいて、およう、あつて、さうさ、年増、女房の
 あつて、おき、ひいて、あつて、おき、さうさ、あつて、さうさ、
 まつや、おき、ひいて、あつて、おき、さうさ、あつて、さうさ、
 さん、金のさうさ、あつて、おき、さうさ、あつて、さうさ、
 汗、さうさ、あつて、おき、さうさ、あつて、さうさ、
 腹、さうさ、あつて、おき、さうさ、あつて、さうさ、
 さうさ、おき、あつて、おき、さうさ、あつて、さうさ、
 ろ、さうさ、あつて、おき、さうさ、あつて、さうさ、
 め、さうさ、あつて、おき、さうさ、あつて、さうさ、
 さうさ、あつて、おき、さうさ、あつて、さうさ、
 さうさ、あつて、おき、さうさ、あつて、さうさ、
 さうさ、あつて、おき、さうさ、あつて、さうさ、
 コ、さうさ、あつて、おき、さうさ、あつて、さうさ、
 酒、さうさ、あつて、おき、さうさ、あつて、さうさ、





なまらやいのこひはまよひをぬらふまはらにふたふたのこころはまはら
まはらのまはらのまはらのまはらのまはらのまはらのまはらのまはらのまはらの

かへまをれのお歌

新波にのりーあーこま 強ちうん

かへまをれおかをよきとせ

道中膝栗毛葎端太電

